

コンセンサスは、帝国の発展という共通認識のもと、商務院という異なる行政機関との間でも形成されていた。それ故、品質や奨励金制度といった生産計画が持つ問題が、スペイン継承戦争以後輸輸入量が急増したことで顕在化する中で、その解決のために海軍と商務院との協調が図られ、制度の再設計が行われた。そして、そこにおける海軍は、自らの利益を考慮しながらも、植民地という帝国の利益もまた勘案し、その利益の獲得のための選択を行っていたのである。

一六世紀後半アウクスブルクの《危機対応型》

森林政策——災害史研究の視点から——

渡邊 裕一

森林、およびその産物たる木材は、産業化以前の世界において、人間生活の基盤を支える欠かすことのできない重要な役割を担ってきた。かつて人類は、まさに「揺籠から棺桶まで」のすべてが木製であった時代を長らく生きてきたのである。さらに、石炭が一般化する以前は、木材と木炭こそが主要燃料の第一位であり続けた。とりわけ多くの人々が集住する大都市では、木材の持続的な安定供給が、穀物をはじめとする食料品や飲料水の供給と並んで、都市住民の生存を左右する重大な課題となった。

アウクスブルクの場合、支配領域を持たず、周囲をいくつもの他勢力に囲まれていたが故に、都市の木材供給は周辺他勢力とのその時々々の政治・権力関係に強く依存せざるを得なかった。そのための事前交渉や紛争解決を含めた事後処理は、都市の森林政策の重要な課題のひとつであった（拙稿「中近世アウクスブルクの木材供給——都市の森林所有とレヒ川の木材流送」『西洋史学』二四一号、二〇一一年）。木材不足が生じた場合には、都市当局の命を受けた食糧管理局が、臨時の貧民への木材供与および廉価での木材販売を組織し、都市住民および下層民の生存維持に努めている（拙稿「貧民への木材供与——一六世紀アウクスブルクの事例から」『エクフラシス』二号、二〇一二年）。

本報告では、災害史・気候史研究の視角から、『危機の時代』における都市の森林政策について論じた。木材の安定供給を脅かす可能性のあった気候悪化、異常気象、自然災害に対し、都市はいかなる方策をとったのか？ 一六世紀後半～一七世紀は、小氷期と呼ばれる寒冷期の真つただ中にあった。小氷期とは、一四世紀から一九世紀初頭までの長期にわたって観察される寒冷期で、天候不順および平均気温の低下をその特徴とする。この間、比較的温暖な時期もあったものの、おおむね天候は安定せず、異常気象も頻発した。

近年、気候史研究の進展により、農業史、医療史、人口歴史学などのすでにその重要性が認められている分野とならんで、これまでさほど注目されてこなかった諸分野、例えば立法行為や建築活動、

書物の刊行、衣服のモード、音楽や芸術市場といった分野にいたるまで、小氷期の気候変動がいかなる影響を及ぼしたのか、あるいは及ぼさなかったのか、が活発に議論されるようになってきた。しかし、小氷期の森林経営・林業に対する影響、あるいは都市の木材供給に対する波及効果については、いまだ十分に議論されていない。『近世の環境史』を著したR. ライトは、気候史と森林史との間にはいまだ大きな隔たりがあると指摘する(Reinhold Reith, Umweltgeschichte der Frühen Neuzeit, München 2011)。穀物や作物と比べ、樹木の成長速度は非常に遅く、気候悪化の影響を論証するのは確かに難しい。しかし、寒冷期に暖房用の燃料＝薪の需要が増大したのは確かである。木材を消費する都市からの視点を導入することで、気候史と森林史との接続も可能となるだろう。

本報告では、森林書記の会計簿を分析し、小氷期の中でもとくに気候の不安定期であった「一五七〇年の危機」および自然災害に対する損害最小化の努力を考察した。一五七〇年の危機では、この時期に森林書記の年棒が倍増し、その支出総額も一五七二年に第一のピークに達しており、森林行政の活発化が確認された。またアウクスブルクは、この時期以降、ティロルの各地に伐採専用森林(期間限定で木材の伐採権のみを契約)を新たに獲得し、木材調達の選択肢を増やすことに成功している。ある森林からの木材調達は何らかの理由で不可能となった場合、その他の森林を伐採することで、木材の供給危機に陥る危険性を回避することが可能となった。期間限

定の森林伐採権を地理的に分散させて同時並行的にいくつも獲得する手法は、リスク管理および損害の最小化という点で、とくに自然災害時にこそその効力を発揮した。例えば一六〇四年、暴風雨がホーエンエッグ森林の太木をなぎ倒し、また木材の搬出に必要な木製の護岸設備を破壊した。そのため、当森林からの木材の搬出は不可能となったが、森林書記は、その他の森林から木材を搬出し、さらに不足分を補うべく、筏材・木材の購入への支出を通常よりも増大させることで、自然災害の影響を最小化させることに成功している。

以上の考察から、森林の獲得が都市の領域拡張政策に重要な役割を果たした《領域支配型》の森林政策を展開したニュルンベルクとは異なり(拙稿「中近世ドイツ都市における都市の森林政策―研究の動向とニュルンベルクの事例から」『比較都市史研究』二七号一卷、二〇〇八年)、アウクスブルクの森林政策は、市内のエネルギー危機や周辺勢力との緊迫した政治情勢、そして自然災害にも柔軟に対応することを目的とした、多様な手法で木材の安定供給を目指す《危機対応型》であったと結論付けた。